

目次

はしがき……………秋山 虔……………一

研究篇

『源氏物語』へいろごのみ〉の思想……………長谷川政春……………七

〈紫式部〉の身と心の思想・序説……………高橋 亨……………三七

源氏物語の文学思想……………池田和臣……………七一

——我が名を冠した物語の作者としての——

『源氏物語』の文学思想試論……………今井久代……………三三

〈国家の要道〉たりし本文

日本古代思想史の内なる『源氏の物語』……………上原作和……………三七

『源氏物語』「飽かず」考……………高木和子……………三三
——物語展開の動因として——

光源氏の〈みさを〉……………竹内正彦……………五九
——「若菜下」巻における「うたての翁」をめぐって——

複合動詞化する『源氏物語』……………安藤徹……………三一
——ポストテキスト論のために——

『源氏物語』と〈罪〉の系譜……………小嶋菜温子……………二六九
——批評の成り立ちへ——

『潤』郎訳源氏物語』(昭和十四年)と
北村久備『すみれ草』(文化九年)……………齋木泰孝……………二八九

資料篇

弘安源氏論議(管見・簡校)……………高田信敬……………三九

研究篇

一、学説〈つむぎのみ〉の再生

本稿は、『源氏物語』における〈いろいろのみ〉の思想を、そのテキストの読解を通して論ずるものである。

大正十三年九月、折口信夫は、「最古日本の女性生活の根柢」という論文で、古代文献に記された伝承や沖繩の習俗などに依りながら、女性の聖性とその役割を述べている。^(注1)それは、一口で言えば、巫女・「神の嫁」^(注2)ということである。同じこの年には、すでに折口は、「国文学の発生(第二稿)」において、神である「まれびと」とそれに対応する「神の嫁」を対の構造として取り上げて、以後、展開されてゆく、神あるいは人の〈性〉のパラダイムを提示している。^(注4)

この神と神の嫁や男と女の関係性を読み説いてゆく折口がその基本としたものは、靈魂信仰であり、言わば〈靈魂の政治学〉であった。たとえば、地方の豪族が朝廷に奉る女——采女の解釈にもそれはよく認められる。地方の神に仕える巫女である采女が親しく天皇に近侍することは、その采女を介して当該の土地の靈魂を天皇が所有することを意味するというわけである。決して采女人質説には与しないのである。^(注5)

また、多くの女たちを「よばふ」神や英雄や天皇たちを古代伝承の中から掬いあげてきて、古代の王者のもつべき理想的な倫理としての〈いろいろのみ〉を定位した、その基底にあるものも巫女としての女がもつ〈靈魂の政治学〉そのものである。折口は、ほぼ同じ時期に、古代後期(平安朝)を、「もの、あはれを知り、色をこのむ——好ましい状態に男女関係を処理すること——」のが、紳士・淑女の理想主義とせられた時代である」と言い、^(注6)「やまと心の内容も、平安王朝では既に、変化し過ぎて居た。此君子理想の素質は、実にいろいろ好みと同一内容を持つて居た」と述べていて、^(注7)後年、折口学説として確立される〈いろいろのみ〉に関連する要素が読み取れる。折口は、「いろいろのみ」の語を古代後期の文学にのみ関連させて用いているわけではなく、たとえば、「古代民謡の研究」において、

『源氏物語』〈いろいろのみ〉の思想